

賀茂季鷹資料抄 短冊編 : その一

盛田, 帝子
日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/10350>

出版情報 : 文献探究. 38, pp.104-118, 2000-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

賀茂季鷹資料抄 短冊編 — その二 —

盛田 帝子

賀茂季鷹の和歌和文は至る所に散在する。全集のない今そのひとつひとつを収集し紹介することが急がれるが、今回は茶庵庵文庫主の御協力を得て、御所蔵の季鷹短冊を紹介する。季鷹が多くの短冊を認め、相当数が現存していることは周知の事実である。中には『雲錦翁家集』に収録されぬ歌があり、また同集収録歌の詞書を補うような情報の記されたものもある。同じ歌を繰り返し認めていることも多いが、これは書としての価値を意識したものと思われる。ここに季鷹の短冊をある程度一括して掲げることが、季鷹の筆跡を知る上でも有意義なことと思われる。

一般に季鷹の短冊には桜紅葉の散らし模様が多い。これは、寛政十三年十二月二十日余り吉野の桜と龍田の紅葉を移し植えて雲錦亭と名付けて移り住み（『雲錦翁家集』）、自らも雲錦と号したことによると思われる。いずれも典麗なつくりのものが多い。寛政十三年は二月五日に改元されているので、季鷹が雲錦亭に移ったのは享和元年のことかとも思われるのだが、現段階では詳らかではない。いずれにしても、桜と紅葉の散らされた季鷹好みの短冊は、ほぼ四十八歳（享和元年）以降に記されたものとみてよからう。若書きの字体

の短冊に桜紅葉の散らし模様は見受けられない。

さて、今回紹介する茶庵御所蔵の短冊は御所蔵中の五十五枚である。和歌のみでなく狂歌の短冊も含まれており興味深い。和歌の場合「季鷹」と本名が、狂歌の場合「雲錦」と号が署名されている。短冊の寸法は縦が三四・九糎から三六・九糎、横が五・二糎から六・五糎である。紙質や模様は多岐にわたる。短冊二五のように布地に和歌を認めたものもある。模様は季鷹好みの桜紅葉散らし模様の短冊の他、白短冊、内曇り短冊、金銀の箔、砂子、動植物をあしらった豪華な短冊などがある。書式で珍しいのは短冊七である。長い詞書が短冊の上部に収まらないので、美観を損なわぬよう歌の行間に割り込むかたちで詞書が書き入れられている。この歌が詠まれたのは文政十年四月頃、季鷹が浜松殿に召された時である（『雲錦翁家集』所収の同歌詞書）。浜松殿は水野忠邦。文政九年十一月に大坂城代から京都所司代・侍従となつている。旧蔵者に関しては、短冊番号五・二一の裏に「秋圃愛玩」（朱印）と押印されていることから斎藤秋圃の旧蔵、また短冊十の裏には「燕齋」（朱印）と押印されていることから小笹喜三氏旧蔵か。短冊二八・三一・三六の裏の押印は『京都古書組合総合目録』第十二号（平成十一年十一月）

に掲載されている「小笹喜三翁菟集切」の裏の押印と同じものである。「平安堂主人」(朱印)「直賤」(朱印)と判読した。短冊二九・三〇・四四の裏には「桐園」(朱印)と押印されているが、現在のところ旧蔵者は未詳。記して御教示を仰ぐ次第である。

凡例

- 一 各短冊には通し番号を付した。
- 一 短冊影印の右側の()内に寸法・模様・色等を記した。
- 一 短冊影印の左側に翻字を記した。
- 一 『雲錦翁家集』『狂歌云禁集』所収歌には翻字の下の()内にその旨を記した。
- 一 裏書のあるものは短冊の翻字のあとに影印を掲載し、左側に翻字を記した。
- 一 翻字は可能な限り資料に忠実に翻字するが以下の点においては例外とする。
 - ア 漢字はすべて通行の字体に統一した。
 - イ 濁点を私に付した。
 - ウ 詞書には句読点を私に付した。

一 (縦三六・一糎×横六・〇糎。金描二鳥薄紅地)

一 寶待
手屋
もも千々にあやなす人の言の葉はひとつまことにしか
ずぞ有ける 季鷹

一 実勝千虚 もも千々にあやなす人の言の葉はひとつまことにしか
ずぞ有ける 季鷹

二 (縦三六・六糎×横六・〇五糎。銀引霞秋草銀箔金銀砂子)

月前水鶏
終夜たゝくひなは柴戸につき面しろくさせば也けり
季鷹 (『雲錦翁家集』卷一 夏歌)

〔裏書〕

月前水鶏
終夜たゝくひなは柴戸につき面しろくさせば也けり
季鷹 (『雲錦翁家集』卷一 夏歌)

鶴印 加茂社司 山本阿波守

三 (縦三六・二纏×横六・一纏。金引霞)



古寺夕霧 いらかおち軒端くちにし古寺にたく空だきや秋の夕霧

季鷹

四 (縦三五・九纏×横五・三纏。雲母摺り雪月花布目)



水上螢 夏夜は火に入むしも有物をいけ水さらでとぶ螢哉 季

鷹 (『雲錦翁家集』 卷一 夏歌)

五 (縦三六・一纏×横五・六纏。色違打曇銀引霞)



詠雪廻文歌 しらゆきはなべつゝめども小野山や野をもとめつゝへ
なばきゆらし 季鷹 (『雲錦翁家集』 卷四 俳諧歌)

〔裏書〕



西京加茂神主 加茂季鷹先生筆 「秋圃愛玩」(朱印)

六 (縦三六・三纏×横五・九纏。打曇)



山家経年 花を愛もみちに染る心こそすてし浮世の余波也けれ
季鷹 (『雲錦翁家集』 卷三 雑歌)

七(縦三四・九纏×横五・五纏。布目)



浜松殿に参し日、新樹にしめやかに雨そほふりければ、なか／＼におかしくて、はしちかく見居たりしに、このけしきをよめと仰られしかば

きのふかも花にかこちし雨そとは誰か若葉の露に見てまし 季鷹
〔『雲錦翁家集』巻一 夏歌〕

八(縦三六・三纏×横五・九纏。金銀描桜紅葉散らし銀引霞布目茶色地)



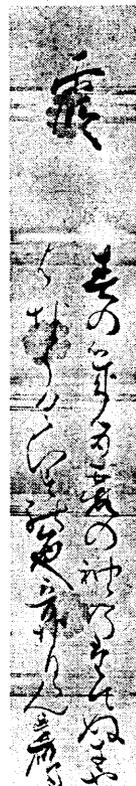
新樹 水枝さす葉広くまがし若かへではなにかへても見べかりけり 季鷹〔『雲錦翁家集』巻一 夏歌〕

九(縦三六・四纏×横六・〇纏。銀引霞銀描小松模様布目)



都時雨 よしやふれ都大路の村しぐれ軒端づたひに袖はぬらさじ 季鷹〔『雲錦翁家集』巻一 冬歌〕

十(縦三六・四纏×横六・一纏。銀引霞銀描桜紅葉散らし模様布目水色地)



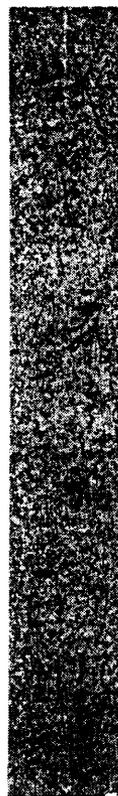
霞 春のきる霞の袖のたてぬきやはなうぐひすの色音なるらん 季鷹

〔裏〕



「燕斎」(朱印)

十一(縦三六・三糰×横五・二糰。金砂子)



試筆 鷹 霞たち梅かをりけり瓢形の月雪花の三のはじめに 季

十二(縦三六・七糰×横六・〇糰。雲母摺桜紅葉散らし模様布目)



名所紅葉 季鷹 龍田河さらすも織も紅葉のにしきや神の御けし成らん

十三(縦三六・七糰×横六・〇糰。雲母摺桜紅葉散らし模様布目)



恋哥中に ゆみ矢とりあだにむかへる物部の命をぢまぬ恋もす
る哉 季鷹 (『雲錦翁家集』卷三 恋歌)

十四(縦三六・七糰×縦六・〇糰。雲母摺桜紅葉散らし模様布目)



月前雁 さくら花見捨しはるの心をば月にしれとや来啼厂が音
季鷹 (『雲錦翁家集』卷二 秋歌)

十五(縦三六・八糰×横六・一糰。銀引霞)



社頭時雨 奉るぬさなぬらしそ村しぐれぬかづく袖はさもあらば
あれ 季鷹 (『雲錦翁家集』 卷二 冬歌)

二二 (縦三六・〇糶×横五・八糶。金砂子天地金泥)

詠雪廻文哥 しらゆきはなべつゝめども小野やまや野をもとめつゝ
へなばきゆらし 季鷹 (『雲錦翁家集』 卷四 俳諧歌)

〔裏書〕

西京加茂祠官 加茂季鷹先生筆

西京加茂祠官 加茂季鷹先生筆 「秋圃愛玩」 (朱印)

二二 (縦三六・二糶×横六・〇糶。銀引霞布目)

吉野にてよみし花歌の中に
芳野山はな散にけりいざ出ん世をばうしとも思ほえぬ身は 季鷹
(『雲錦翁家集』 卷一 春歌)

〔裏書〕

上加茂祠官山本氏。正四位下安房守。天保十三年九月卒ス。年九十一。加茂季鷹大人

二三 (三六・九糶×横五・七糶。水泡模様)

西京加茂祠官 加茂季鷹先生筆

故郷雪 朽し軒あれし筧も雪降はむかしに復る故郷庭 季鷹
 (『雲錦翁家集』卷二 冬歌)

二四 (縦三六・一糎×横五・六糎。銀引霞銀描菊散らし)



十六夜月 きその夜は最中今夜は十六夜と月の光に誰かわけまし
 季鷹 (『雲錦翁家集』卷二 秋歌)

二五 (縦三四・八糎×横五・六糎。布地)



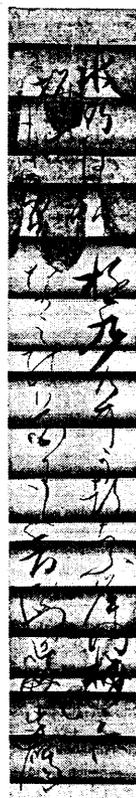
苗代に花のちりたる所
 水に栖かはづも花に声す也さくらながらゝ小田の苗代 季鷹 (『雲錦翁家集』卷一 春歌)

二六 (縦三五・六糎×横五・四糎。色違打曇)



月前雁 さくら花見捨し春の心をば月にしれとや来啼厂がね
 季鷹 (『雲錦翁家集』卷二 秋歌)

二七 (縦三六・六糎×横六・〇糎。打曇銀引霞)



水のほとりに梅花さきたる
 ゆく水にうつろふ岸の梅がえはなみの花にも香をやかすらむ 季鷹
 (『雲錦翁家集』卷一 春歌)

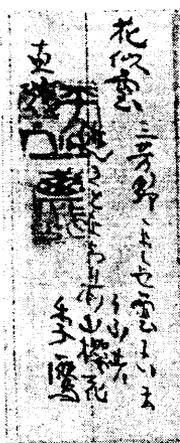
二八 (縦三五・五糎×横五・四糎。銀引霞銀描草花銀砂子)



花似雲 三芳野よしや雲にはまがふ共ゆきとなちりそ山桜花

季鷹(『雲錦翁家集』卷一 春歌)

〔裏書〕



花似雲 三芳野よしや雲にはまがふ共ゆきとなちりそ山桜花

季鷹

直賤 「平安堂人」(朱印)「直賤」(朱印)

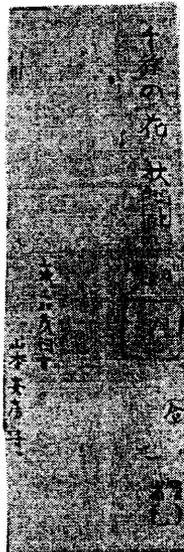
二九(縦三六・二糰×横六・〇糰。桜紅葉散らし模様)



秋月揚明輝

見まゝに心もすめり秋は只つきに光のそはるのみかは 季鷹

〔裏書〕



千種の花 秋「撰歌」(藍印)「桐園」(朱印)

「合」(朱印)「桐園」(朱印) 山城上加茂祠官 山本安房守

三〇(縦三六・二糰×横五・九糰。吹絵紅葉茶色地)



炉邊閑談 埋火のもとつこゝろをかきくづしかきおこし簡語る夜
は哉 季鷹(『雲錦翁家集』卷二 冬歌)

〔裏書〕



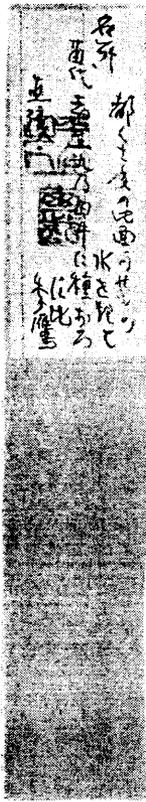
「桐園」(朱印) 山城加茂 山本季鷹

三二 (縦三五・七纏×横五・九纏。銀描桜紅葉散らし模様)



名所苗代 つくばねの此面かのもの水せきてしづくの田井に種お
ろす比 季鷹

〔裏書〕



名所苗代 つくばねの此面かのもの水せきてしづくの田井に種
おろす比 季鷹

直賤 「平安堂人」(朱印)「直賤」(朱印)

三三 (縦三六・四纏×横五・九纏。金描薄布目)



山家雪 降つみし雪をや煮まし水掬ふみちさへたえし山陰の菴
季鷹

三三 (縦三六・一纏×横六・〇纏。色違打曇銀引霞布目)



霞初聲 花鳥の色音にそはん春色をまづ見せ初てたつ霞哉 季
鷹

三四 (縦三六・七纏×横六・一纏。雲母摺桜紅葉散らし模様布目)

織女まつるところ空を見人有
 棚はたに心をさへやかしにけんけふの暮るは立またれ筒 季鷹(『雲
 錦翁家集』卷二 秋歌)

織女まつるところ空を見人有

棚はたに心をさへやかしにけんけふの暮るは立またれ筒 季鷹(『雲

錦翁家集』卷二 秋歌)

三五(縦三六・四纏×横六・一纏。色違打曇銀引霞)

雪の下駄と云を狂哥にてよめと有しとき
 此下駄はきりか桜かしらゆきのはをも花をも埋みはてぬる 季鷹

雪の下駄と云を狂哥にてよめと有しとき

此下駄はきりか桜かしらゆきのはをも花をも埋みはてぬる 季鷹

三六(縦三五・八纏×横五・九纏。茶色地布目)

冬月
 影 季鷹

病にくすしと恋しき人にあへるといづれかといひしに
 いく葉われは何せん一夜だにあふにかへむといひてし物を 季鷹

〔裏書〕

夜に病にくすしと恋しき人にあへるといづれかといひしに
 いく葉われは何せん一夜だにあふにかへむといひてし物を

註 葉師

病にくすしと恋しき人にあへるといづれかといひしに

いく葉われは何せん一夜だにあふにかへむといひてし

物を 季鷹

平安堂主人 直賤 「平安堂人」(朱印)「直賤」(朱印)

三七(縦三六・五纏×横六・〇纏。茶色地布目)

大ぞらの雲きりのみか木葉さへはらひ尽してすめる月

冬月
 影 季鷹

三八（縦三六・二糎×横六・〇糎。銀描桜紅葉散らし模様水色地）



山家夢 山住も夢は心の外なれやすてゝ来し世に行かへる覽
季鷹（『雲錦翁家集』卷三 雑歌）

三九（縦三六・四糎×横六・〇糎。打曇）



元日雨降しかば
昨日まで冬ごもりせし草も木もうるふ世しるき春をむかへつ 季鷹

四〇（縦三六・四糎×横六・〇糎。藍朱型押し模様銀砂子布目）



月 類なきひかりを四方に敷しまややまと島根の秋夜月
季鷹（『雲錦翁家集』卷二 秋歌）

四一（縦三六・七糎×横六・〇糎。銀箔布目）



歳暮 とゞまらぬとしはをしまで老も亦まち迎てん花鳥の春
季鷹（『雲錦翁家集』卷二 冬）

四二（縦三五・五糎×横五・六糎。打曇）



月明き夜すみ田川の堤に夜ふくるまで見居て
言とはん鳥だにも居ず月独すみ田がはらの夜はの静けさ 季鷹

四三 (縦三六・三纏×横六・〇纏。水色霞引描草布目)



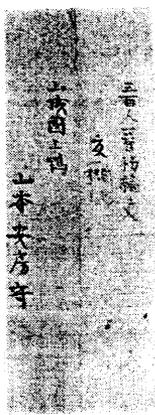
正述心緒歌 徒に世を尽さめや天地にすこしい足ぬ益荒男の輩 季鷹 (『雲錦翁家集』卷三 雑歌)

四四 (縦三五・五纏×横五・二纏。打曇)



社頭杜宇 片岡のもりの梢になきすてゝかみ山とほく行ほとゝぎす 季鷹 (『雲錦翁家集』卷一 夏歌)

〔裏書〕



三百人一首初編二入 夏 「撰歌」(藍印)「桐園」(朱印)

山城国上鴨 山本安房守

四五 (縦三六・五纏×横五・九纏。色違打曇銀引霞)



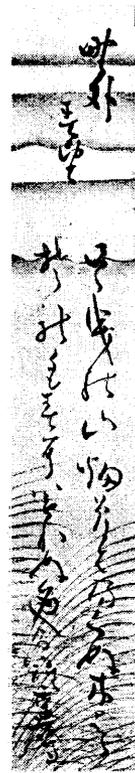
家内の雪といふを狂哥にてこひしかば 天窓をさし忘たか南無三宝荒神まつにかゝるしら雪 季鷹

四六 (縦三六・〇纏×横六・〇纏。銀描桜紅葉散らし模様銀砂子朽葉色地布目)



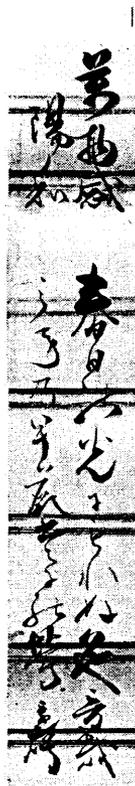
初雪 踏分む蹟を思へば訪もうしとはぬもつらし庭の初雪 季鷹 (『雲錦翁家集』卷二 冬歌)

四七（縦三五・二糎×横五・八糎。銀引霞銀描薄布目）



野外春望 足曳の山畑そばのくぬ木はらそれも春にはもれぬ色かな 季鷹（『雲錦翁家集』巻一 春歌）

四八（縦三六・〇糎×横五・九糎。銀引霞雲型吹き付け）



萬物感陽和 春日の光にもれぬ色音哉みねの早蕨たにの鶯 季鷹

四九（縦三六・〇糎×横五・三糎。黄土色地）



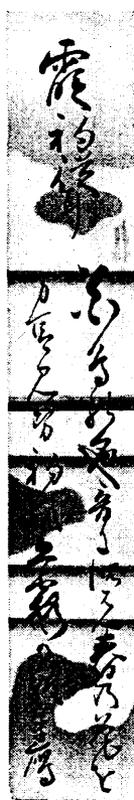
社頭郭公 かた岡のもりの梢に啼すて、神山とほく行ほとゝぎす 季鷹（『雲錦翁家集』巻一 夏歌）

五〇（縦三六・四糎×横六・一糎。色違打曇銀引霞布目）



節分の戯作 鬼は外ふくは内へといり豆のまめでことしも歳をとり 升 雲錦（『狂歌云禁集』）

五一（縦三六・三糎×横六・一糎。銀引霞雲型吹き付け）



霞初聳 花鳥の色音にそはん春の色をまつ見せ初て立霞かな 季鷹

五二（縦三六・五糎×横六・〇糎。銀引霞銀描梅散らし）



遠山花

らむ 季鷹

芳野山かぜになびかぬしら雲とみけるや花のさかり成



五三 (縦三六・三纏×横五・八纏。銀砂子布目)

神祇

日の守り夜の護りと天つ社くにつ社や鎮めましけむ

季鷹



五四 (縦三五・九纏×横五・五纏。打曇)

八十の春に 梓弓八十の春をむかへつゝもゝとせとねらふまとはゝ
づさじ 季鷹

五五 (縦三六・四纏×横五・九纏。桜紅葉散らし模様)



芳野ゝ花見にまかりし時

吉野山はな散にけりいざ出ん世をばうしとも思ほえぬ身は

季鷹

(もりた ていこ・日本学術振興会特別研究員)